

## ご挨拶～これまでの2年間を振り返り、今後に向けて

奥田 徹 (日本菌学会会長)

2011年のニューズレターの巻頭言では、東日本大震災への追悼、日本菌学会の根幹は分類学であることは不変だが守備範囲を拡大すべきであること、アマチュア菌学者の興隆とそれに呼応した運営体制の必要性、次世代の育成の重要性、インパクトファクターが記載されたMycoscienceのますますの向上、様々な集会企画と日本菌学会会報への広範囲な記事の掲載、国際連携の重要性、素早い情報伝達と小回りのきく運営体制の整備、これらのニーズに対応した庶務と会計を目指すことなどについて述べました。

この2年間のわが国や世界を取り巻く変化、菌学をとりまく変化は、これまで誰も経験したことがないものでありました。これらの急激な変化に対応することは容易なことではありませんが、積極的にご協力頂いた理事の方々、実務を担当された幹事や編集委員の方々、評議員や各種委員会委員の方々、そして何よりも会員皆様のおかげで、積み残しはあるものの、目指した項目のいくつかは実現し、無事任期を終えることができました。ここに皆様に心から感謝申し上げます。

さてこの度、私は大変僥倖ながら2013年度～2014年度の日本菌学会会長に再選され、就任することになりました。改めて気持ちを引き締め、新しい執行部と共に、以下のようなことを目指して行きたいと考えております。

### 菌学を取り巻く世界情勢やわが国の状況への対応

生物多様性条約と2010年に採択された名古屋議定書は、最近マスコミの話題にはあまり上りませんが、水面下で議定書の批准や国内法制定に向けた議論がなされています。菌類命名の世界では、メルボルン規約発効に伴い、学名の統一の検討が進行中です。次世代シーケンサや解析ソフトウェアの発達、生物の全ゲノム解析を加速し、菌類のタイプ由来株のゲノム解析やDNAバーコーディングの利用が話題になっています。これらに伴い新しい遺伝子の塩基配列とその機能が発見されつつあります。さらに地球規模で生物全体像の把握を目指した情報収集のための国際イニシアティブが湧いています。このいずれもが、条約、法制度、規約などの取り決めであったり、塩基配列情報であったり、その他情報とデータベースであったりですが、もっとも重要なのは生物、生物としての菌類そのものの理解です。

さて、長年議論があった新学習指導要領が、小学校は2011年から、中学校は2012年から、高校は2013年度入学生から適用されます。大変辛いことに、これまで学校教育で軽視されてきた菌類（微生物）が目の目を見るようになってきました。いわく、小



学校では「水中の小さな生物」「生物の多様性」、中学校では「分解者として扱う菌類や細菌類」、高校では「微生物とその利用」「微生物の分類と種類」などの項目があります。2013年のセンター試験の「生物I」では菌類や微生物に関する設問も出されています。

最近、菌類や微生物がマスコミを賑わしています。2012年のNatureには「菌類の脅威」と題する記事が掲載され、カエルツボカビからイネばか苗病、サンゴのアスペルギルス症など菌類病原菌の話題が満載でした。近頃のテレビ番組では「ダニ、カビ、水虫の極悪トリオ」とか食中毒への注意喚起が頻りに放送されています。一方で、先の日本菌学会第57回大会で取り上げられた通り塩麴が空前のブームであり、海外では味噌や醤油といった発酵食品が「健康食品」として脚光を浴びています。

微生物の医薬品への利用は、一時期に比較するとトーンダウンしていますが、経済産業省では「天然化合物の安定産生技術開発」を創薬基盤の一つとして掲げています。微生物の生分解性プラスチックや一般化学製品製造への利用は加速しています。話題のバイオエタノールの最先端技術は、まさに菌類の酵素の利用です。

これらはいずれも菌類が社会的にも産業上も重要であることの証しであり、これまでの日本菌学会の先輩方が築いてきた菌類・菌学の地位向上を目指すチャンスです。

### 広報と普及、出口の模索

広報・企画・国内集会などを通じて、小学生から高校生ならびに大学生やアマチュア菌学者への菌学教育の場の提供、一般社会人や他の分野への普及活動を行います。すなわち前年度までの

講習会、シンポジウム、ワークショップに、大学生のための菌類学入門など新しい企画の集会を加えたいと思います。さらに菌類を大学で学んだものが卒業後、継続して菌類について研究もしくは菌類を利用できる職種に就くための出口の模索を行いたいと思います。例えば、あまり利用されたことのない、資源としての菌類材料を提供してくれる専門家（採集と分類同定の専門家）とそれを利用する研究者（大学研究室や企業）のマッチング援助を企画中です。ホームページ、ツイッター、フェイスブック、メーリングリストを利用した情報発信も加速したいと考えています。また菌類と菌学会を紹介し、教育現場でも利用できる小冊子の出版を計画しています。

## 外部とのつながり

純血主義や組織の特殊性の強調は、発展を阻害します。ゲノム科学の興隆と様々なイニシアティブの加速は、日本菌学会による、積極的な外界との連携を後押ししています。たとえば微生物生態を研究する際に、メタゲノムから菌類の種を推定することが頻繁に行われるようになりました。しかしその研究者は菌類の実態を知らず困っています。これこそ菌学者がお手伝いするよいチャンスですし、その研究者が日本菌学会に入会する機会ともなります。2013年1月に、日本微生物学連盟主催のフォーラムが開催されました。このような場を通じて、関連学会との連携が議論され、他学会との共催の研修や年次大会での学会同士の相互乗り入れなど、いくつかの新しい集会を企画したいと考えています。

海外では先に述べた学名統一のための小委員会の活動、生物多様性把握のための国際的イニシアティブなどが推進されています。また今年度はアジア菌学会が北京で、来年は第10回国際菌学会がバンコクで開催されます。こういった動きに連動するような活動を目指したいと思います。

以上のように、将来を見据えた企画を打ち出す予定ですので、とくに若い会員の方には、それらの機会を充分に利用して頂きたいと思います。すでにやっておられる方も多いですが、他学会の研究者との共同研究、海外の研究者との連携、国際集会や委員会への積極的参加です。そういう個人プレーを推奨いたします。そして得た情報をぜひ学会に還元して戴きたいと思っています。

## 魅力ある出版物

Mycoscience、日本菌学会会報、ニュースレターという3つの出版物が、それぞれの特徴を出せるように編集上連携します。Mycoscienceは、これまでの関係者と会員のご努力で、その質がますます上がり、海外での評判が高くなりました。これを継続できるように、できるだけ早く出版できるような体制を整えていきます。日本菌学会会報には周辺分野の解説記事を掲載してきました。これを継続したいと思います。ニュースレターは速報性が求

められます、その期待に応えるようにいたします。

## 会員サービスと経済的自立

会員であることによる利益享受が十分であろうかという議論があります。Mycoscienceのインパクトファクター上昇といううれしいニュースもありますので、会員が論文を投稿することによって利益があると思えるようなサービスを、アマチュアが菌学会員になっていてよかったと思えるような企画やサービスを、企業に賛助会員となって戴いていることによるメリットが見えるような場をそれぞれ提供し、会員と非会員のサービス上の差別化をはかることが必要だと考えています。

運営上、継続しなければならぬことは多くありますが、新体制になった際に理事・委員・幹事の引き継ぎを充分に行えば、一から出直す必要はありません。また年次大会の運営では、任に当たられる方は、私自身の経験からも、大変な苦勞を背負うものだと認識しております。この継続性や引き継ぎのための方策も練っていく予定です。

今年度は、前理事の方々のご努力で、科研費を戴くことができました。しかし今後継続的に公的資金を得られるかは不明です。ここまで述べてきたことと反するかもしれませんが、こういう世の中の状況下で経済的自立と社会的基盤の確立、そして学会の規模に見合った活動を目指すことが必要ではないかと考えております。そのためにも法人化の議論を改めて推進したいと考えています。

上記いずれの内容も、会員の皆様のご支持がなければ意味がありません。様々な機会を通じて、必要に応じ積極的に、ご意見を賜りたいと存じます。新体制の理事、新幹事、新編集委員の方々、および新評議員の方々と協力して任に当たりたいと思います。

## 退任のご挨拶～時流に乗るかトリアリズムか？

奥田 徹（日本菌学会前会長）

2011年から2期4年間にわたる日本菌学会会長職を本年3月末に終了いたしましたので、ご挨拶申し上げます。前半の2年間も後半の2年間も、協力的で意欲ある理事や幹事、編集委員ら、実際に任に当たられた方々と会員の皆様のおかげで、無事任期を全うすることができました。ここに深謝いたします。以下にこの4年間に順不同で振り返ってみますが、これらは、その前の60年近い本学会の活動の延長線上にあり、諸先輩方からの積み重ねの継続があるからこそ可能であったことを先にお断りしておきます。

**Mycoscience と日菌報：** Mycoscience はシュプリンガー・ジャパン社からエルゼビア・ジャパン社へ出版社が移行し、本学会の財政にとっても、よい効果が生まれました。編集委員長は理事職の中でも激務です。小野義隆氏、永井浩二氏、岡田元氏、寺嶋芳江氏をはじめ、海外の方々を含む全編集委員の皆様方の献身的な努力がありました。Mycoscience は本学会の根幹で、質の高い評判の国際誌です。2005年時点では海外責任著者は3.4%でしたが、2014年末には66.7%に上昇しました。IF値が評価のすべてではありませんが、2010年の掲載当初(0.774)から比較的高い値を得ることができ、2013年には1.288と上昇し、自誌引用は13%ときわめてよい値であることは喜ばしいことです。しかし、2013年に平塚賞受賞論文を選出できなかったのは、会長として申し訳ないと思っております。また、2013年度の学会賞を受賞された柿嶋眞氏に受賞講演のためのご出席をいただけなかったのは残念でしたが、受賞の盾をお渡しするのが大幅に遅れたのは、ひとえに会長の怠慢であり、大変ご迷惑をおかけしました。重ねてお詫びいたします。授賞と言えば、学会賞や奨励賞を授賞された方々の総説の掲載が滞っていましたが、編集委員長らの努力によりかなり改善されたことはありがたいことです。

**海外との関わり合い：** この4年間にアジア菌学会2回

(AMC2011 仁川, AMC2013 北京)と第10回国際菌学会(IMC10 バンコク)を経験しました。また、韓国菌学会との合同シンポジウムは、国際担当理事の安藤勝彦氏が中心となって第2回(ソウル)、第3回(小松)と回を重ねて2国間交流会を実施できました。企画担当理事の今野宏氏にはAMC2013の日中合同シンポジウムとIMC10のシンポジウムでご講演いただきました。国際担当理事はIMA代表、本学会会長はアジア菌学会代表を兼ねていますので、今後も学会役員がこれら国際組織とのパイプ役となることが期待されます。国際的な菌学関連の委員会は多くがボランティアに参加できます。そもそもは研究者仲間が自由に意見交換をする場であり、何の

権限もないのですが、ここでの議論の結果が世界のスタンダードとなることがあります。したがって意欲ある多くの若い研究者が、国粹主義に陥ることなく、海外かぶれせずに、柔軟で幅広い視野を持ちながら、こういう場に参加し、その情報を本学会にフィードバックされることを大いに期待しております。閉塞感のあった日本経済もようやく回復の兆しが見えてきて、将来、国際菌学会を再びわが国で開催するのも夢ではありません。

**国内の他の学会との交流：** かつては学会の補助金は自動的に支給されるものだと信じられていたこともありました。もはやそういう時代は終わりました。JST 補助金に応募するため、会計担当理事の山岡裕一氏、矢口貴志氏、星野保氏、編集委員長の小野義隆氏、岡田元氏、庶務担当理事の清水公德氏らが協力して、国際情報発信強化計画調書を作成申請しましたが、結果として2年に1度しか獲得できませんでした。一方、日本微生物学会連盟の理事会では、小さな学会が将来合併することもありうるという議論がなされました。また、連盟に属する複数の学会による相互乗り入れ集会や合同年次大会も企画実行され、国内集会担当理事の服部力氏らが中心となって本学会も参画しました。たとえば、微生物生態を研究する際に、メタゲノムから菌類の種を推定することが頻繁に行われますが、その研究者らは菌類の実態を知らずに困っています。このことは、他学会の研究者に実体としての菌類を知っていただくよいチャンスです。異業種との交流が新しいチャンスを生むというのは現代社会の共通の新しい通念です。

**次世代の育成と出口：** 広報企画担当理事で、アイデアの宝庫の細矢剛氏が中心となり、服部力氏、中桐昭氏、田中千尋氏、後藤康彦氏、松井英幸氏ら企画担当や国内集会担当理事の協力を仰ぎ、シンポジウム、ワークショップ、教育研修、菌類講座、ウェブサイトの改良と維持、小冊子企画編集など縦横無尽に活躍いただきました。なかでも「菌類ワールドへの誘い」は美しく内容も豊富で大変評判のよいものに仕上がりました。大学で学んだ菌学をもとにして産業界で活躍する場が少なくなった現在、出口としての菌学の利用分野を開拓しようとする研究材料収集とその利用という興味深い企画を立案実行しましたが、残念ながら効果は上がりませんでした。

**アマチュア：** 本学会はアマチュア会員の比率が多いことが特徴で、もはやアマチュアは客人ではない、アマチュア菌学者の興隆に呼応した運営体制の必要性から、後藤康彦氏、松

井英幸氏に理事として、国内集会を担当していただきました。このことは今後の本学会の屋台骨をしっかりと支えていただくためにも大変良いことだと自負しております。アマチュア菌学者の方々の興味の幅は大変広いですが、共通項は「菌類が好きだ」ということです。「好きだ」が「義務」になってしまったら元も子もありませんし、鶏口牛後のたとえもあるとおり、単にプロのマネをするのではなく、アマチュアでなければできないことをやっていただけたら学会の両輪になるのではと思っております。

東日本大震災： 2011年2月に三重大学の高松進氏および中島千晴氏を訪問し引き継ぎを行ったあと、さてこれからという矢先に東日本大震災と福島原発の事故が起きました。副会長で庶務担当の金城典子氏、国内集会担当理事の服部力氏らと相談して東北の会員の皆様をサポートできないかと考えましたが、十分にはできませんでした。そこで同年9月の第55回大会（札幌）と2011年度の支笏湖フォーレでは実行委員の皆様のご協力で若干のご援助を致しました。11月のシンポジウムも東北支援の一環として開催しました。さらに2014年度の宮城フォーレでは、ようやく東北の本拠地で観察会を開催することができました。全国から集まった実行委員の方々のおかげです。

懸案の出版物： 本学会創立50周年などの企画で懸案となっていた出版物、「菌類の事典」は鈴木彰氏、中桐昭氏らの、「菌類の生物学」は柿原眞氏、徳増征二氏らの、「新菌学用語集」は金城典子氏、根田仁氏らの努力で日の目を見ました。しかも、いずれも大変評判が良く、なかでも「菌類の事典」は第

2刷の刊行が予定されています。これらが教育普及に役立つものと考えております。

庶務と法人化： 庶務は比較的地味な担当です。副会長の金城典子氏は、あたかも本学会の母で、過去の執行部の判断など参考にすべきことで大いにご助力いただきました。一方清水公徳氏は会計担当理事の星野保氏と協力して、法人化再検討のための情報収集と調査に努め、議論を進めてくれました。会員と非会員の差別化、法人会員へのサービスなどのアイデア、クレジットカード決済の提案と調査も清水氏が率先して推進してくれました。

時流に乗るかトリビアリズムか？： iPS細胞をはじめ、再生医療などの時代の最先端分野には大型の国家予算がつくところから、多くの研究者の目が行きがちです。一方で、自ら「絶滅危惧種」と自嘲気味に話をする分類学者もいます。分類学は生物学の基礎中の基礎であり、本学会の根幹です。些末な研究に拘泥するのではなく、生物全体を見渡すような視野を持っていただくと他の分野の方々にも影響を与えられます。そういう観点で、常に分類学の重要性を説いていただきたいと思います。

最後に： 2014年3月の最後の理事会では、4月からの新会長・副会長ならびに新理事・新監事の候補者の方々にもご出席いただき、単に傍聴ではなく、実際の議論に参加していただきました。これは引き継ぎとして大変効果的だったと思います。良い雰囲気が表れている集合写真を掲載しますので、ご覧ください。



2014年度第4回理事会集合写真，2014年3月21日（土・祝）玉川大学研究室棟 B104にて